

大溪

源古本舗

……
ガイドブック



大溪

源古本舗

不老職人と一緒に

歴史が刻んだ跡を楽しめ

時間の流れを感じ取る

ファサード

(牌樓)

ファサードからバロック的な風情が溢れる 大嵯峨時代の繁盛さも目に浮かぶ

大溪老街は、外壁のリノベーションが始まったのが19世紀の終わりだといわれる。日本統治時代に入ると、日本総督府は都市計画を実施した。それによって、地元にいる腕のある伝統的な職人たちがこの現代化プロジェクトから排除されたと同時に、大溪老街での町屋建築の西洋化は最初の1ページを開いた。

日本は明治維新を進めるに当たり、文明開化で社会が開放的になる次第、建築のスタイルもデザインのコネプトもヨーロッパ文化を吸収してより開放的になった。大溪もその影響を受けて建築の様式は大幅に変わった。もともとの閩南式建築を赤レンガでロマネスクアーケードやゲートル、パラペットを作り、見事なデコレーションの見せられる華麗なるファサードに改装した。それに、当時の台湾でバロック様式を用いた建築物の集大成とも言えるんだ。ちなみに、仕事の依頼をされていた職人たちは努力を注ぎ込むアイデアがパクられることを防ぐため、工事中に大きなキャンバスでさえファサードを覆うこともある。

和平路にある源古本舗は大溪老街で最も古い建物の一つだが、いまになっても保存状態もよく残されている。古家の先祖様がこの建物を購入してから、ファサードに彫られている元オーナーの屋号「全昌」と「KANG」を残すことにした。「KANG」とは「江」のローマ字表記である。

立派なファサードがずらりと立ち並んでいる街並みは昔の大溪の商業活動の熱さを想起させ、そして清朝末期から日本統治時代を経て今までの近代社会発展史を再現する。「二坎三落兩過水」というのは二つの店舗で、奥行き深い三進式の空間(落)があって、それぞれの進は中庭と廊下でつながれている。



© 朱逸文 桃園市政府文化局



© 朱逸文 桃園市政府文化局

一進

(エントリー)



古い写真で記憶を語る 古裕發から源古本舗へ

桃園市大溪区和平路48号と48-1号に位置する源古本舗は、台湾特有の「二崁三落兩過水」町屋様式を保存し、大溪老街では一番歴史の長い建物の一つだが、幾度かの修復にあたって当時の構造を維持する。

源古本舗の前身と言えば、糕餅や雑貨を扱う「古裕發商号」であって創設者は「阿炎哥」こと古金炎である。古金炎は新竹県新埔出身でもともと旅芸人の足跡を追いかける小商いだが、あるきっかけで「古裕發商号」を立ち上げた。それは、当時の大溪で豪商林本源の一族が大漢溪を利用し、木材の交易はじめ、後に塩や米などの取引も始まり、水運で栄えた。古金炎はそのビジネスチャンスを見通し、1894年に和平路58号に拠点を設けて「古裕發商号」を創立した。

1930年代、古家は江家に和平路48号と48-1号の建物を賃貸して「南北貨(各地の食品・雑貨)」の商売を始めた。そして1943年に正式に建物を購入して古家の一族も住めるようになった。南北貨やタバコ・お酒と伝統的な糕餅を販売している「古裕發商号」は商売繁盛で、関西や三峽からはるばるとやって来た客が大勢いる。運営面では、地元の民俗行事・お祭り及び結婚にまつわる行事などにしっかりと結びついた。特に旧暦の六月24日の關聖帝君生誕祭と七月の中元祭・八月の中秋(ムーンフェスティバル)などのお祝いの日に、地元の住民たちは必ず「古裕發商号」に伝統的な糕餅を注文する。

あの時、「古裕發商号」の店頭の前で置かれた蔡梅餅(梅餅)と「味の素」の看板は、今でもきちんと保管されている。普通レベルのお酒は地面に置かれているが、高級なやつはショー・ウィンドーの中にちゃんと陳列されている。エントリーに入ると、最初に見えたのは小売りのお酒の入る壺で、うしろにあるのが「月桂冠」の壺で、一番左にあるのが輸入品の目薬である。取引先として台北大稻埕の南北貨老舗との取引がとても頻繁で貨物を仕入れる時、詳細な住所も書くことなく、「大溪古裕發商号」と書けば届けられるそうだった。

帳簿の中で秘めた商業文化の変遷 絶滅寸前の蘇州号碼

謎めいた記号に見える蘇州号碼(台湾号碼とも呼ばれる)は中国の蘇州で生まれたとされる数字であって、中華圏でよく使われる商業用途の数字である。歴史研究の材料となる文献(土地の契約書とか、帳簿とか)のページをめくったら、本文で土地の面積、銀両、重量、長さを述べる時、よく蘇州号碼を使うことがわかるでしょ。

蘇州号碼は伝統的な中華圏文化と商業文化を秘めている。欧米のビジネスシステムが導入されたにつれて、蘇州号碼は徐々にアラビア数字に置き換えられる。それでも、台湾や香港、マカオにある漢方薬店、雑貨屋と茶餐廳では、現在も使用が続いている。



役に立たないものを創意工夫で 再生させる無用の用

大溪老街での町屋の様式と言えば、最初のエントリーが店舗のほうが多い。古家は外装を飾るに当たって、修復にとって役に立たないと思われる材料を最大限に活用していた。無駄なタイルとか、白蟻によって損傷を受けた梁と柱とか、使われていない木製はしごとかで店頭を飾った。

無駄なタイルは床に埋め込まれて、雅趣に富んだインсталレーションになってこの家の物語を語っているようだ。さらに、大工職人に頼んで白蟻によって損傷を受けた梁と柱をテーブルと椅子に変身させた。使われていない木製はしごのほうは、庶民の服を被って、矛盾の感じないアートにもなった。



© 陳飛 桃園市政府文化局



© 陳飛 桃園市政府文化局

できるだけそのまま 「わびさび」の美意識とライフスタイル

お屋敷の修復だが、先代の家主・古乾桂は家の歴史を尊重したくて、できるだけそのままにしておこうとの思いによって、百年以上の年月にわたる暮らしの痕跡を保存した。不完全さも一種の美しさだと古乾桂は思っている。時の流れが古い壁に刻まれている美しさはまさに侘び寂びの美意識とライフスタイルだ。

このような修復に対するコンセプトは、古乾桂がかつて日本とヨーロッパに見学してきた経験から徐々になりたてたものだった。華美さに拘らずに質素で静かな様子や不完全であることを追求するのは侘び寂びの美意識。

修復の方法と言えば、生活の文脈を再現することに基づいて最小限の介入を心がけている。そして、修復の倫理も考慮し、現実と適度に妥協する上で、適切な材料を選んで壁や壁画を修復して屋内の壁の保護を強化した。それに、糕餅を作って残った煙の跡など存在していた暮らしの痕跡を保存することを中心に行っていた。

2019年、修復の工程が完了した。目立つ痕跡がほとんどみられないくらい、お屋敷の歴史から醸し出したそのシンプルさと美しさは今でも輝いている。



© 陳飛 桃園市政府文化局



© 陳飛 桃園市政府文化局



© 陳飛 桃園市政府文化局

中庭



古い井戸は人と人のつながり 溢れている職人魂もここにあり

エントリーとエントリーの間には中庭がある。中庭を「天井」「深井」とも呼ばれることもあるから、井戸が見えるのが当然だ。

大溪の水質はとても良くて、この源古本舗の中にある井戸の水も味が甘美。なので、近隣の隣人は今でも昔の習慣を続けて、端午になると源古本舗に来て井戸水を汲水する。「午時の水は一口だけで、三年間葉飲むことに勝つ」という台湾の諺がある。それは、端午当日の午時(午前十一時から午後一時まで)は一年の中に陽の気が最も旺盛する時刻なのだ。

中庭に見える石板と石材と言えば、もともと中国大陸からの貨物船が使っていたバラストなのだ。当時では、建築資材の入手がなかなか容易ではないから、バラストだって、お屋敷の一部になったわけだ。

五つのアーチが飾るアーケード様式に灰色のレンガ

二つの建物が隣り合うことで、源古本舗の中庭は格別に広くて開放的だ。五つのアーチが飾るアーケード様式で、漆喰される柱は年を経て表面が徐々に剥がれて灰色のレンガのようになって意外と素朴に見えて安らげるんだ。きちんと積み重ねられるレンガを見て、あの時の職人さんの持つ勤勉さと物事に対するこだわりがよく分かる。



© 朱逸文 桃園市政府文化局

二進

(大廳)



© 陳飛 桃園市政府文化局

わびさびを体現しながら 伝統的な価値観と地元の特徴も凝縮される

建物そのものが古いだが、やはりテクノロジーの使用を避けるのは難しい。たとえば電気を供給するための電気ボックスというものは、壁に掛かってヴィジュアル的にはまさに異物混入なのだ。わびさびの美意識を保つため、家主は竹芸職人の劉昭明先生に頼んで、壁を美化させた。劉先生は百本の細い竹を厳選して「風動」という煤竹を完成した。煤竹の竹芸品は素朴な壁に合わせて、落ち着いた雰囲気を出し、典雅でぬくもりのある画面になったわけだ。

色がまだらになっている壁と素朴な木製テーブルや椅子、この空間にあるすべてのものは源古本舗の家主がわびさびの美意識に対する憧れと追及だ。これらの物はいつもと変わらなくて自然に古色蒼然たる中庭に存在している。



© 陳飛 桃園市政府文化局



© 陳飛 桃園市政府文化局

百年の歳月はここで生き返った 繰り広げられる人間ドラマは昔も今も

源古本舗の二進(大廳)は神様や祖先を祀る部屋であると同時にお客さんを迎えるリビングも兼ねています

壁面の修復工事が進んでいる途中、家主は何度も修復チームと話し合ったりして、お互いの考えを調和しようとした。違った工法で建物に取り返しのつかないダメージをしたことがあるから、万全の注意を払わなければならないと家主は思っている。したがって、壁画を修復するために、適切な材料と方法を選別した。修復によって、一般の人は自分の目で壁の違いを確かめるようになった。それに、ミネラルペイントを使って「全色」処理をして昔の感覚になぞらえる。ちなみに、「全色」とは、画面の色彩を調和することだ。八か月にかけて壁面の修復工程が完成した。まだらになっている壁のストーリーもそのまま壁面に残した。



© 邱重建 桃園市文化基金會

食卓

「古裕発商号」の時代から、店舗のお客さんは大溪の住民だけでなく、台北の三峡や新竹の関西からはるばるとやって来る人も多かった。桃園や新竹という地域の人は「古裕発商号」を貿易拠点とし、新たに商売のネットワークを作り出した。各地からの商売人を招待するため、お昼の食卓の上には常にキノコと乾燥エビの入れた炒めピーフンが用意されていた。この食卓を見て、昔の貿易の活況も様々な人々が集まっていた賑やかなで人情味あふれる光景も想像できるでしょ。



© 邱重建 桃園市文化基金會

床

床は長い年月がたっているから割れる所があちこちあるんだが、百年以上の歳月で家族とゲストの足跡も記されている。大切な足跡を残すため、修復工事では剥離の部分のみを更新するようになった。

ありふれたものはすべて 毎日の暮らしからなる知恵と美学

床に埋め込まれてあったタイルは、家のクロニクルになる、

修復工事による残された材料を再利用するのは、先祖たちが養ってきた習慣だ。例えば、この廊下の床に埋め込まれてあるタイルというのは、以前修繕や修復が行われた時のものなんだ。それだから、ここに見えるタイルはそれぞれ、サイズも色も材質も異なっている。この違いによって、全体的にランダムな楽しみやカジュアルな雰囲気を感じ取れるんだ。ここに見えるタイルはクロニクルのように、先祖たちの材料や物を大切にしている性格とユニークな庶民美学を記録している。



© 董昱 桃園市政府 新聞處

片隅に、おばあちゃんたちの宝物を

これは、修復工事が終わったあと、隣人からもらった古い日用品だ。源古本舗が記憶の保管庫のように、隣人たちは自分の暮らしてきた過去の思い出を古い日用品に託して、ここまで運んできた。イベントを行うたびに、我々はおばあちゃんたちの宝物を使って登場させる。例えば、壺やストーブに生け花したりして、火鉢に炭焼きしたりした。そうやって、もう使わなくて余るとされるものを再生させて、おばあちゃんたちも嬉しくて気持ち的に若返りになる。



© 董昱 桃園市政府 新聞處

三進

(後廳)



© 陳飛 桃園市政府文化局

家族のプライベート・スペース 時の流れがゆっくりと感じられる空間

後廳

二進にある大廳は神様や祖先を祀る部屋だが、三進は家族の空間。ここも家族の長老が住む場所で、家族や親しい友人だけが入れらるんだ。非常に静かな場所で、竹製の椅子に腰を掛けて、読書したり雑談したりして、まるでタイムマシンを使って過去に戻った。

我々はプライベートキッチンを設けて、お客さんが予約で我々の一日限定の家族になれるんだ。料理は季節に合う食材を使用する。もちろんいい風景もある。はるかに久しい町屋の中に座って思い出がたっぷり詰まってる料理で醍醐味を共有しあおう。



© 陳飛 桃園市政府文化局



© 陳飛 桃園市政府文化局

灶跔(ツァウ・カー)

閩南語で「灶跔」(ツァウ・カー)とは台所、「灶頭」(ツァウ・タオ)とはストーブという意味だ。

「古裕發商号」の全盛期の頃、「灶頭」は三つあった。そのうちの二つは糕餅作りに当たって必要とされるポーククロスや保存豚肉を料理する為、廊下に置かれた。ここにある「灶頭」はお風呂を沸かすこととお菓子を作るための設けられたのだ。修復工事をする前の時代は、湯沸かし器など現代的な設備がなくて、お風呂も料理もこの「灶頭」を利用しないと行かないんだ。焼べる薪は隣の木製品店からもらった残り物と木炭だ。真冬の日に、お風呂に入るのはひと苦労なんだ。

残された「灶頭」は、古家がわざと修復せずに昔の様子にした。全盛期の栄光を記念することに加えて、社会のために思い出の印を保留した。

キッチンキャビネット

昔の頃、壁と一体化したキッチンキャビネットは鍋釜やボウルなど食器がたくさん収納されている。「古裕發商号」の時代は商売繁盛で家で食事するお客さんが多かった。あの時使われていた古いボウルとお皿は今でも保存されている。これらの物を文化的遺物として扱って展示ケースに収めるのは、源古本舗のやりかたではない。今になっても、食器や花器、茶器として活用し続けて訪ねてくるお客さんと共有する。それは、庶民生活のぬくもりを永遠に受け継ぐ思いなのだ。



© 陳飛 桃園市政府文化局

別棟建築





© 陳飛 桃園市政府文化局



© 陳飛 桃園市政府文化局



© 陳飛 桃園市政府文化局

大溪

源古本舖

指導單位： 文化部 MINISTRY OF CULTURE 桃園市政府文化局

内部文書なので、ここから持ち出さないでください